



TITLE:

計画1-2 和歌山県、奈良県の野生ニホンザル地域個体群の生息実態調査(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

五百部, 裕; 小田, 亮; 松本, 晶子; 田代, 靖子

CITATION:

五百部, 裕 ...[et al]. 計画1-2 和歌山県、奈良県の野生ニホンザル地域個体群の生息実態調査(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1997, 27: 77-77

ISSUE DATE:

1997-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164956>

RIGHT:

2. 研究成果

(1) 計画研究

計画1-1

黒部川流域に生息するニホンザル
地域個体群の動態
加藤 満（愛知県立旭野高等学校）、赤座久明
（富山県動物生態研究会）

昨年度に続いて、富山県宇奈月町の黒部川流域に分布するニホンザル野生群を対象にして、テレメーター装着のための捕獲と生息調査を行った。

すでにテレメーターを装着している群れについては、96年12月にMO群、MT群、97年2月にON群のメスの成体を捕獲してテレメーターを更新した。また、97年1月に新しく識別した群れ（仮にSU群とする）のメスの成体を捕獲してテレメーターを装着した。調査対象にした黒部川の8.7kmの区間には上記の4群の外にテレメーターを装着している群れが1群（OHB群）、装着していない群れが2群（OHA群、OT群）生息しており、今回の調査で、昨年より1群多い7群の生息が確認された。

1～3月までの積雪期のホームレンジを記録した結果、ホームレンジの長径と面積は、OHB群が2.54km、1.79km、ON群が4.39km、3.50km、SU群が2.54km、0.68km、MO群が1.91km、0.41km、MT群が1.67km、0.92kmであった。

今年初めて、独立した群れとして観察し、テレメーターを装着して識別することができるようになったSU群のホームレンジは、ON群、MO群、MT群のホームレンジの中に位置しており、0.68kmのうちの97%がいずれかの群れのホームレンジと重複していた。この群れは、個体数やホームレンジの位置などから推定して、数年前にON群が分裂した際に行方不明になっていた分群である可能性があり、今後観察を継続したい。

計画1-2

和歌山県、奈良県の野生ニホンザル
地域個体群の生息実態調査
五百部裕、小田亮、松本品子（京都大・理・動物）、田代靖子（京都大・霊長研）

本研究は昨年度の共同利用研究の継続であり、和歌山県中津村と奈良県大塔村において野生ニホンザルの生息実態ならびに人間の生産活動を把握し、猿害発生メカニズムを探ることを目的とした。本年度も地域住民への聞き込み調査とニホンザルの生息実態調査を平成8年7月と11月に行った。

聞き込みの結果によると、大塔村では10～20年前あたりから猿害が発生している。猿害対策として薬草栽培を始めているが、一部の薬草はサルの被害にあっているようである。爆音器や電気柵も使用されているがそれほど盛んではなく、その背景には過疎化の進行があると思われる。中津村においてもやはり10～20年前あたりから被害がみられるようになってきた。中津村においては聞き込みのかたわら住民に記録用紙を配り、サルの目撃例を記録してもらうように依頼した。村の各集落に全部で47部を託し、約1ヶ月後の返送を依頼したところ、29部が返送されてきた。これらの結果と聞き込み、直接目視による記録とを照合した結果、中津村周辺には4～5群のニホンザルが生息していると予想される。

昨年度、本年度と聞き込み、アンケートを中心とした調査を行ってきたが、来年度以降は直接目視を中心として各群れの個体数ならびに遊動域を把握すること、またこれまでの被害や捕獲頭数の経緯を明らかにし、生業活動との関連について考察することを目指していきたい。